

# ささえあう

2011年  
9月30日  
第15号

事務局 大分市大字森679-6 リフォーム夢舎内 TEL・FAX097-527-5443

## 「100人に1人発病」 — 統合失調症

息子が15歳で統合失調症を発病して、今年で39歳になり、心の病とのおつきあいは24年目になりました。

今思い返してみると、本人も家族もこの病気について知る機会は全くなく「なんで、どうしたんだろうか」と悩み苦しみました。発病時の恐ろしく不安な気持ちは今でも忘れる事が出来ません。

を知っていただく医療講演会開催の機会を作って欲しい。みんなが知っていれば、誤解による偏見も無くなり、本人はもちろん家族の気持ちは随分楽になります。

## 一人で悩まずに — 家族への支援も

私でなければ子どもの事はわからない、守れないと感じている母親が一人で悩むのではなく、日頃感じている問題やいろんな悩みを語り合う事で知識の交換ができる場も必要だと思

## 親の思い — 「心労を重ねる日々…」

# 知ってほしい。救ってくれるのは理解

大分精神障害者就労推進ネットワーク理事 川口二美

この病気について知る機会が少ないのは、20数年経った今でもほとんど変わっていません。治療の面、福祉の面で20年前とは比べものならないほど進んできている実態があるなか、こんな病気がある事が常識としてみんなが知っているようになって欲しい。100人に1人の発病率です。身近な病気なのです。

## 適切な治療で必ず改善 — 知らせて

10年ほど前に統合失調症と名前が変わりました。以前は分裂病と呼ばれ、不治の病ともいわれ、親の落胆は図り知れませんでした。この暗いイメージを変えて行きましょう。

「心の病とはどんな病気で、早期に適切な治療を受ければ、必ず改善される。」というメッセージを早い時期に、本人と家族に届けてほしいと思います。

医療機関での対応も必要ですが、出来れば学校（保健の授業やPTAの勉強会）や職場などで、心理面も含めた相談体制が必要だという事

ます。

治療は長引きます。病識を持ってない人もいますし、再発もあります。家族は心労を重ねる日々が続きます。忘れられがちな家族への支援が欲しいです。

20年も前の私の体験ですが、最初入院した病院で担当医と看護師さんが明るく、優しく「大丈夫ですよ。心配しないで。」と慰めて下さった事、息子が症状の真ただ中にある時、「こんな良いところがあるのよ。」と言って下さった看護師さんの言葉に支えられました。不安の中にいる家族にとって、優しい言葉かけはホット肩の荷がおります。

## 緊急時や引きこもりに訪問型支援を

こんな些細な家族支援もありますが、訪問型の支援もこれからどんどん充実させて、緊急時の混乱や引きこもりへの対応に大切な支援になっていってほしいです。

心の病に対して自然と理解が深まって地域で

世間話として話が出来る環境になっていければと思います。親が元気で余力のある内に親なき後の事を考えて家族も本人も様子はそれぞれ違っています。回復に向かって頑張っている姿を見ていただき、理解を深めていただくために皆で声を出し合って、知っていただく勇気を持つべきではないかと思ひます。

### 困るのは教育・就労・偏見など…

今までに困ったことはなんですかと聞かれたら、教育、進路、薬の調整、兄弟への負担、就労、偏見差別、人間関係、親子分離の難しさ、本人親のストレス、地域への気兼ねでしょうか。

今、「誰もが安心して暮らせる大分県条例」づくりの動きが出ています。今までに本人家族が体験して「困ったこと、悲しかったこと、辛かったこと」のアンケートを集めています。

思いを伝えることでこれからの人生に希望が持てるようになるのではないかと期待をしているところです。是非、皆様のご支援をお願いしたいと思います。

### 地域で支えるシステムができれば

また、精神障がい者も高齢者福祉と同じように、地域で支えるシステムが出来るよう願ひます。

## ネットワーク「第6回総会」開催

# 地域は変わり始めている

「新年度方針」—地域連携をさらに広げよう

### 70名が参加

大分精神障害者就労推進ネットワーク第6回総会が6月11日、別府大学のメディア教育センターで開かれました。約70名が参加、「地域連携」に取り組むなどの新年度方針を決定したあと、「地域からの報告」があり、竹田や国東のフォーラムの取り組みの報告が行われました。



### “地域連携”の有効性明らかに

ネットワークを代表して藤波代表があいさつ。

安部事務局長が活動報告と方針提案を行いました。報告では、地区フォーラム開催のなかで、地域で当事者や家族、福祉・保健関係者、行政、医療などの地域的な連携の重要性と有効性が明らかになったことが指摘されました。これを受けて、新年度は「地域連携」を掲げて、「地域連携マニュアル（マップ・ガイドブック）」の作成や、地区フォーラムの開催などの取り組みを積極的に進めていくことになりました。また、地域から必要性を指摘されている「緊急支援体制」をつくるための働きかけも関係団体と協力しながら取り組んでいくことになりました。

### 竹田の報告—「地域は変わる」

「地域からの報告」では、まず別府大学の三城准教授が竹田フォーラムについて「地域の行政や福祉関係者らを中心に、“支援をつなげる”ことを重視して取り組んで来た。3年目のフォーラムには市長の他、議員や民生委員なども多く参加し、福祉を視野に入れたまちづくりの話が行われた。公と民とボランティアは協力できるし、地域は変わることを実感している」と話しました。

## 国東の報告―「障がい者に対する気持ちが変わってきた」

続いて、国東市の小川浩美・障害福祉班長と川野正・輝くピアホーム理事長が報告。小川班長は「最初は戸惑ったが、様々な立場の人たちが参加した実行委員会を重ね、フォーラムには予想を大きく超える230人が参加した。また、ケーブルテレビの協力で番組を作り、フォーラムで上映するとともに、市内に2週間放映され好評だった。行政としても、アンケートで必要性が高かった交通費の助成など、取り組みが進んできた。市民に知っていただくことで偏見のない地域づくりを進めたい」と話しました。川野理事長は、「実行委員会を重ねるなかで、障がい者に対する気持ちが変わってくるのがわかった。みんなが積極的に動いただけ、参加者も増えた。ビデオにも大きな反響があった。事業所やグループホームの利用者は親とともに高齢化してきている。いろいろ経験してもらいたいと思う。しかし、就労は厳しい現実がある」と話しました。

### 知ること、知ってもらおう事が大切

最後に、白石・ネットワーク事務局次長は「報告を聞いて、地域が変わっていったことが伝わってきた。6年前にネットワークに参加したときには、当事者が発言することは考えられなかったが、ビデオで発言を聞いて、励まされる思いだった。知らないことが誤解を生む。地域や企業から受け入れられるようになるためには知っていただくことが大切だと実感した」と話しました。最後に、神田副代表が力強く「みんなで力を合わせて頑張りましょう」と呼びかけ総会を終了しました。

## 2011年度事業計画

# “地域連携”を広げるために全力を

地区フォーラムなど昨年度の取り組みのなかで重要性が明らかになった地域連携、特に医療を含んだ連携の拡大に向けて取り組みます。「地域連携」には様々な課題があります。①孤立した当事者・家族をなくすこと②当事者・家族と支援者、そして行政の連携③これまで個別に支援してきた支援機関・事業者間の連携④医療を含んだ連携一などです。私たちはこれからの1年間、地域連携の諸課題を見直し、当事者・家族、支援者、行政、専門家の共同作業として、有効な地域的連携を作り上げていくために取り組みます。

### 1、就労を支える取り組み

一つひとつの具体的な支援を大事にします

- (1) ネットワーク及びメンバーに寄せられる支援の要請に対して、ネットワークとして全力で支援します。
- (2) 支援にあたっては、各分野の連携と地域的な支援体制づくりに努めます。
- (3) 支援の具体例はネットワークとして共有し、その後の取り組みに生かします。

### 2、地域にネットワークを広げる取り組み

地区フォーラムの開催を支援します

- (1) これまでの地区フォーラムの開催によって、その有効性が明らかになっています。地区における連携づくり、地域に対する啓発、他地域との連携などのメリットを伝えながら、地区フ

フォーラム開催を働きかけたいと思います。

- (2) 開催にあたっては、実行委員会の設置や運営、フォーラムの内容づくりなどの手法を詳しく伝えるとともに、それぞれの地域主導で開催できるよう支援します。

### 3、「地域連携マニュアル（マップ・ハンドブック）」の作成

地域で精神障がい者の支援に取り組む際の基本的な考え方や具体的な方法をわかりやすく説明した「地域連携マニュアル（マップ・ハンドブック）」の作成に取り組みます。

- (1) 「編集チーム」を設置し作業を進めます。メンバーは事務局を中心に理事等の希望者も含めることとし、外部の専門家にも必要に応じて参加を求めます。
- (2) 資金は助成金への応募を検討することとします。

### 4、広報活動の充実

会報「ささえあう」を発行とともに、ブログの活用も進めます。

- (1) ネットワークの活動、最新の情報などを伝えるために会報「ささえあう」の発行やホームページの活用を進め、ブログの活用にも取り組みます。
- (2) 内容はできるだけ具体的なものにして、わかりやすく生き生きとしたものにします。

### 5、緊急支援体制について

緊急時（夜間・休日）の支援体制の充実が急務であることが地域から指摘されています。このため、関係諸団体と連携して緊急支援体制の実現に取り組みます。

### 6、入会の呼びかけ

ネットワークは会員一人ひとりの思いが集まることによってつくられています。一人でも多くの方にネットワークを知っていただき、一緒に取り組んでいただくために会員拡大の取り組みを行います。

## “マニュアル”づくりスタート 地域連携、さらに広げたい



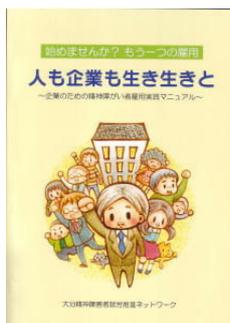
就労推進ネットワークの今年度の重要課題の一つ「地域連携マニュアル」づくりは、5年間の取り組みの積み上げのなかから生まれてきた方針です。

これまで、私たち就労推進ネットワークは二つの“マニュアル”を作成してきました。2008年に「大分で生きる 大分ではたらく」—これは障がいがある人や家族のための福祉・保健・医療の制度やサービスの紹介でした。2010年「人も企業も生き生きと」—これは企業のための雇用実践マニュアルでした。（左に表紙を掲載）

そして今回、私たちは地域で障がいがある人や家族が安心して暮らすために、福祉も保健も医療も行政もいろんな人たちが、地域で連携して支えるネットワークづくりを進めるための“マニュアル”を作成する取り組みを進めています。

地域で暮らす当事者や家族、そして支援する人たちに実際に役立つものを、地域で実際に支援する人たちの思いを込めて作り上げたいと考えています。

「こんなことを掲載してほしい」という声も大歓迎です。ぜひ、ご要望をお寄せください。



# 訪問インタビュー 本人・家族を在宅で支援 訪問看護ステーションりぼん 酒井絹恵さん



いま、国の方針も福祉の考え方も、「精神障がい者を地域で受け入れる」方向に大きく変わってきています。しかし、それは難しいことと考えられてきました。地域で障がいがある人を受け入れる受け皿が少ないこと、そして家族が受け止める自信を持ってない現実があったからです。しかし今、病院もソーシャルワーカー（精神保健福祉士等）を増やし、また訪問看護の取り組みを広げつつあります。そのような流れのなかで、今年1月に大分市内のアパートの一室に訪問看護ステーションがスタートしました。立ち上げたのは、実は1面で川口さんが「子供が20年前に入院したときに、明るく支えてくれた」と書いた看護師さん、酒井絹恵さん。どんな思いでどんな取り組みをしているのか、お話を聞いてきました。

## 「心の病気の人は人間的に素晴らしい」

はじめて働いた精神科病院で患者さんに触れ、「心の病気がある人は人間的に素晴らしい」と思ったのが看護師生活の大半を精神医療分野で過ごすことになったきっかけ—そう話す酒井絹恵さん。今年1月から大分市内に「訪問看護ステーションりぼん」を立ち上げました。発足当時は4名、今は10名の看護師スタッフで精神障がいがある人や家族の支援を行っています。

## 働いて結婚して親孝行もしたいのに…

「ほとんどの人が、働いて、結婚して、子どもを産んで親孝行したいと思っていますんですよ」。でも現実には厳しいものがあります。昨年12月まで勤めていたクリニックで、就労を進

めようと6名の方がヘルパーの資格を取ったことがあったが仕事に結びつかなかったと言います。障がい者の就労面接会にも行ったが、ほとんどの企業は「精神障がい者は受け入れない」と最初から受け付けなかったそうです。

## 就労を受け入れる企業がでてきた

その中で一社だけ、「勉強してみたい」というところがありました。訪問してみると「まず実習を」ということになりました。高学歴で誠実であることが評価され、二人が働き始めます。酒井さんは、昼休みを使って、社員を集めてもらい、“体験発表”を聞いてもらいました。また、「精神障がい者が働ける会社はみんなにやさしい会社だ」と伝えました。会社も支援の制度を活用してジョブコーチを付けるなどの支援

社会福祉法人  
そよかぜ



## ふれあいステーション ひので

就労継続支援B型・就労移行支援事業所

### “心の居場所”・“自分の仕事”を見つけるために



- 自分の心の収まり場を見つけることから始めます
- 「何が自分のする仕事なのか」を見つけたとき、喜びを持って毎日暮らしていけます
- 自分の力で安定したものを見つけることによって一般社会に場所を変えても生きていける。そう思いながら支援しています。

「人とのつながりとか人を大事にする気持ちがわいてくるところです」(利用者の言葉)

速見郡日出町字仁王山3531-24 TEL 0977-73-1326 FAX 0977-76-7555 メールhinode@po.d-b.ne.jp

を行ってくれました。今は、この会社で四名が働いているそうです。

### まじめ。でも理解がないと継続は難しい

酒井さんは、「まじめだから信頼されます。でも自分自身に厳しいから思い詰める。受け入れ側がよほど理解してくれないと継続が難しい」と話します。「大切なのは生活のリズムを整え、食事、クスリを欠かさず、あいさつや話すことを身につけること。定期的に訪問して様子を見ることも重要です」という言葉は、長年の蓄積の重さを感じさせてくれます。

### 家族も苦しんでいる

支援が必要なのは本人だけではありません。家族も苦しんでいます。そして本人と家族のいい関係を作らなければ家庭や地域の生活も就労もうまくいきません。現実には、家族から「電話に出てはいけない」と言われたり、地域の人から「変な人に関わりたくない」と言われたりします。親子の関係が悪い家族が多いと言います。

### 親に「何とかなるよ」・子に「大丈夫」

親の多くは、「自分が先に死んだ後、子どもはやっていけるのだろうか」という心配をしています。その心配が子どもにとっては重荷になり、親を逆恨みすることもあります。訪問看護



は、親に「何とかなるよ」と伝え、落ち伝い気持ちで子どもを受け入れるよう支えます。そして、本人に「見てるよ。大丈夫？きつくない？」とやさしい気持ちを伝えます。そのことで、親も子も楽になるのです。

### 地域で暮らすために

しかしまだ、訪問看護の役割は十分理解されているとは言えないそうです。担当の医師によっては「必要ない」と判断される場合もあり、また訪問看護の内容も医療機関によって異なることがあるとのことでした。

厚生労働省も、訪問医療の重要性を認めつつあります。家族からの要望も強いものがあります。現場の声に耳を傾けることで、いろんな課題が見えてきた気がしました。

## 編集後記

今号は、地域で暮らす当事者の家族の思いに焦点をあてる内容になりました。地域で安定して暮らすことは、就労の前提条件としてもっとも重要なことです。しかし、障がいがある人や家族には、周囲が想像する以上に厳しい状況があることを川口さんは伝えています。統合失調症という病気をほとんどの人は正しく知らず、多くの親が自分で抱え込んで悩んでいる現状。川口さんはそこから一歩踏み出し、声を上げて、私たちに訴えてくれました。具体的な提案もあります、自宅を訪問して本人や家族にアドバイスをしてくれる訪問支援や看護の充実です。投げられたボールが私たちの答えを待っています◆総会后、一つの重要な取り組みがありました。6月28日に、藤波代表、森崎副代表、安部事務局長らが、大分県障害福祉課を訪問し、緊急医療体制の整備などについて、池永障害福祉課長、甲斐課長補佐（精神保健福祉班）と話し合いました。私たちは地域の深刻な実態を具体的かついねいに説明するとともに、法律や制度からみてもより積極的な対応が必要であることを伝えました。緊急医療体制の必要性と大分県の現状の遅れについては意見が一致し、県からは「平日・昼間の応急入院」について整備をする方向との説明がありました。その後、応急入院体制は一歩前進しています。県のご尽力に感謝したいと思いますが、大分県は、全国的に見て県立精神科病院がない3県に入り、しかもそのうち2県（佐賀県と鳥取県）は国立病院があることから、精神科の公的医療は最も遅れていると考えられます。地域で安心して暮らすために何が必要か、さらに取り組み続けていくことが必要であるように思われます（〇）

